様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００９８１

研究課題名（和文）パレスチナ沿岸地域に展開した古代の覇権主義勢力と在地社会に関する考古学的研究

研究課題名（英文）Ancient Hegemonism and the Local Communities in the Coastal Region of Palestine: An Archaeological Study

研究代表者
小野塚　拓造（Takuzo, Onozuka）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・主任研究員

研究者番号：９０７３６１６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：古代西アジアに形成された領域国家や帝国が、その領域と覇権が及ぶ範囲の在地社会にどのような影響を及ぼしたのか。この問いについて、本研究ではパレスチナ地域を事例に、考古資料から通史的に検討した。主な研究成果として、ゼロール遺跡出土資料の整理・検討から、1）エジプト新王国のパレスチナにおける活動拠点とその影響圏の具体的様相、２）同地域の居住史（集落数の増減、集落の性格、人口動態など）が覇権主義勢力の進出と後退にある程度連動していたことなどを明らかにした。また、レヘシュ遺跡とその周辺地域の調査成果を再検討し、３）アッシリア帝国の支配地域における集落の動態と流通ネットワークについても新知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代西アジアに存在した覇権主義的な国家や帝国の研究は、碑文や粘土板文書を用いた文献的アプローチが中心であり、その史料は支配者・統治者の視点で語られていることが多い。それに対して、本研究によって得られた新知見は、いずれもエジプト新王国、アッシリア帝国、ローマ帝国などの直接的／間接的影響に対する在地社会の動向を示す材料となる。また本研究は、西アジアの古代史をより多面的に描き直すことにつながる点で意義があり、外来勢力と在会とが数千年にわたって相互に影響し合ってきたパレスチナ地域の歴史を、大局的かつ実証的に捉える試みとしても重要といえる。

研究成果の概要（英文）：How did the territorial states and empires formed in ancient West Asia affect the local societies within their territories and hegemony? This study examines this question through archaeological data from the Palestine (or the southern Levant) as a case study. The main results of this study are: 1) that the specific aspects of the activities of the New Kingdom Egypt were well examined based on archaeological materials from Tel Zeror, and 2) the fact that the settlement history of the area (the number of settlements, character of settlements, population dynamics, etc.) was, at least to some extent, linked to the presence or absence of hegemonic power. In addition, 3) the recent research on Tel Rekhesh and its surrounding area has provided new insights into the settlement dynamics and trade networks in the Assyrian Empire's sphere of control.

研究分野：考古学

キーワード：テル・ゼロール　テル・レヘシュ　パレスチナ　エジプト新王国　辺縁　帝国　イスラエル王国　土器

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

古代の西アジアは、人類史の画期となる出来事（定住と農耕の始まり、冶金と金属器利用の始まり、都市生活の始まり、国家や帝国の形成など）が、他地域に先駆けて展開していった舞台として重要といえる。このような現代まで受け継がれている社会形態、技術、文化を、人類がどのように獲得し発展させていったのか。古代西アジア史研究はそのプロセスや歴史的意義に迫ることができる貴重な研究分野となっている。本研究は、古代西アジアに形成された国家や帝国についての理解を、その支配領域や影響圏に位置した在地社会を視点に深めることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、パレスチナ沿岸地域に進出した覇権主義的な勢力と、在地社会との関係を描き出し、古代西アジア史の重要なテーマとなっている「国家」や「帝国」の実態や影響についての理解を深めることであった。覇権主義的な強国がパレスチナ沿岸地域の在地社会にどのような影響を及ぼしたのか、在地社会は外来勢力に対してどのように反作用したのか、といった「問い」になるべく通史的に迫ることで、古代西アジア史の新たな側面を描き出せるのではないかと考えた。

本研究のねらい

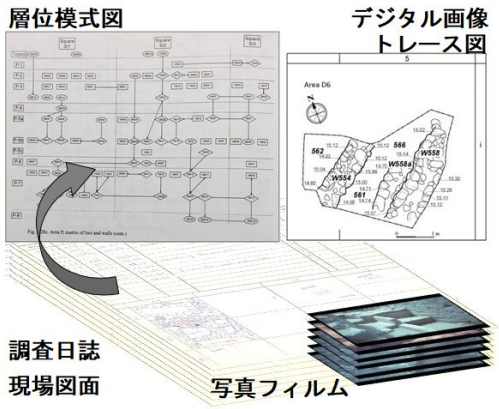
３．研究の方法

パレスチナ沿岸地域の中央に位置するシャロン平原に注目し、その地域史（後期青銅器時代～ローマ時代）を復元することで、同地域に展開した覇権主義的な国家や帝国について考察する。古代におけるシャロン平原は、時代を通して、各勢力の「辺縁」あるいは「境界域」に位置したと考えられ、同地域の居住史には、周辺の領域国家や、もっと外側の帝国の動向が反映されていると予測された。また「辺縁」「境界域」を視座に、領域国家や帝国の動向にせまる研究は手薄になっており、本研究が画期となりえた。またシャロン平原の中心的な集落であったテル・ゼロール遺跡では、日本の調査隊によって 1960 年代に発掘調査が実施されたが、その成果の大部分は未整理となっており、同遺跡の出土資料を整理し、活用することで、同平原の古代史に迫ることができる利点があった。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の一環として、天理大学文学部で保管されているゼロール遺跡の発掘調査資料（現場図面、調査日誌、調査記録など）を、研究協力者の助力を得てデジタル化し、その一部を整理することができた。1960 年代に発掘された同遺跡は本来、シャロン平原の歴史を示す「指標遺跡」となりえたが、層位の整理や出土物の検討が不十分なままであり、それが現在の学術的水準に見合う議論の妨げとなっていた。本研究ではゼロール遺跡の B・C 地区および A 地区の発掘調査時の状況、層位、出土遺構を整理し、ヘブライ大学考古学部の N・ヤハロム―マック教授と共同でイスラエル考古局に保管されていた出土土器を整理・確認し、これらの発掘区における居住史を概ね把握することができた。中でも、後期青銅器時代～鉄器時代に関しては、これまでの層位理解と年代を修正する必要があることが明らかになった。こうした成果を踏まえ、エジプト新王国がシリア・パレスチナに勢力を伸長した前 15 世紀～前 12 世紀、イスラエル王国が繁栄した鉄器時代 IIA 期（前９世紀）、パレスチナの大部分がアッシリア帝国の領域に組み込まれた前 7 世紀頃、アケメネス朝ペルシア時代に相当する前 6 世紀末～前 4 世紀の居住層の再検討を試みた。しかし、調査記録を一つ一つ検証し整理していく作業は予想以上に時間と労力を要したため、ペルシア時代以降の居住層については研究期間内に十分な調査ができず、今後の課題となった。



遺跡の居住史を復元するための基礎作業となる発掘調査記録の整理とデジタル化。研究協力者の大学院生にとっては、発掘調査方法と記録のあり方を体得する貴重な機会となった。

その中で、シャロン平原におけるエジプト新王国の影響については、新たに重要な知見が得られた。これまでにシャロン平原の南端部のアフェックでエジプトの拠点遺構が発掘されており、周辺にエジプト新王国の勢力が経営する荘園があったと解釈されてきた。今回のゼロール遺跡の出土物調査では、後期青銅器時代のエジプト様式の土器が事前調査で把握していた以上に多く確認された。こうした物的痕跡と新たな層位解釈・年代比定と合わせて同遺跡の居住史を復元すると、前 14～前 13 世紀にかけてエジプト新王国の活動がシャロン平原の北部まで及んでいたと考えられる。ただし、ゼロールでは、シャロン平原南部に比べると物質文化に見られるエジプトの影響は限定的であり、むしろ青銅器産業を営んでいた在地社会の継続性が特筆される。その後の前 13 世紀後半から前 12 世紀前半（第 20 王朝時代）の居住層に関しては、本研究成果として、ゼロールにもエジプトの拠点が建設された可能性、地元の青銅産業におそらくエジプト由来の技術が導入されていた可能性が指摘することができた。今後さらなる検証が必要であるが、シャロン平原におけるエジプト新王国と在地社会との関り方や距離感が変容していく状況を提示できるようになった。

ゼロール遺跡出土資料の整理作業

そのほか、ゼロールで発掘された各時代の居住地の性格、シャロン平原におけるセトルメント・パターンを通史的に再検討したところ、同平原では、エジプトやイスラエル王国の勢力が伸長した時代と重なるように遺跡数の増加し、いくつかの町が繁栄する傾向にあることが分かった。なお、この傾向はヘレニズム時代やローマ時代には当てはまらない可能性があり、今後の検証課題となっている。

(2) 研究成果の国内外における位置づけとインパクト

古代西アジアに存在した覇権主義的な国家や帝国の研究は、碑文や粘土板文書を用いた文献的アプローチが中心であり、その史料は支配者・統治者の視点で語られていることが多い。それに対して、本研究によって得られた新知見は、特にエジプト新王国、イスラエル王国、アッシリア帝国の直接的、間接的影響に対する在地社会の動向を示す材料となり、古代西アジアに形成された国家や帝国の実態についてのより多面的な理解につながる。また、外来勢力と在地社会とが数千年にわたって相互に影響し合ってきたパレスチナ地域の歴史を、大局的かつ実証的に捉える試みの一つとしても意義がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小野塚拓造	４．巻 74-1
２．論文標題 「東地中海における青銅器・鉄器時代移行期」を理解するために	５．発行年 2022年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hashimoto, H, Kuwabara, H., Onozuka, T., Hasegawa, S.	４．巻 2
２．論文標題 Excavating at the Lower Shelf of Tel Rekhesh	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Proceedings of the 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East	６．最初と最後の頁 281-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 小野塚拓造
２．発表標題 南レヴァントにおける青銅器・鉄器時代移行期の様相
３．学会等名 アコリス考古学プロジェクト2022　公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 工藤洋大、小野塚拓造、山花京子
２．発表標題 古代エジプト新王国時代におけるガラスの白濁技法の変遷の解明
３．学会等名 日本文化財科学会第39回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Takuzo Onozuka and Ofer Naveh
２．発表標題 Bronze Industry Remains at Tel Zeror Revisited
３．学会等名 Urbanism and Technological Innovation: A view from Ancient Israel: The 2nd Workshop（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小野塚拓造
２．発表標題 考古資料から探る鉄器時代の人々といきものとの関り
３．学会等名 古代オリエント博物館『シンポジウム 西アジアのいきものを巡る歴史と文化』（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takuzo ONOZUKA, Hidemasa HASHIMOTO, Hisao KUWABARA, Shuichi HASEGAWA
２．発表標題 Amarna Letters (EA237-239), and Tel Rekhesh
３．学会等名 ASOR (American Schools of Oversees Research) Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takuzo Onozuka
２．発表標題 Tel Rekhesh and Its Connectivity through the Iron Age: A Preliminary Perspective
３．学会等名 ISF-JSPS online workshop, Between Tel Rekhesh and Horvat Tevet: New Insights on Connectivity in the Eastern Jezeel Valley during the Late Bronze and Early Iron Ages（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関